

RETAILER ACADEMY NEWS

Dec 2022 | Bentley Motors Japan

ニュースで振り返る ベントレー モーターズの2022年



2022年も残り少なくなりました。そこで今回は、年末企画として「ニュースで振り返るベントレー モーターズの2022年」と題し、ベントレー モーターズにとって大きな転換点となるビッグニュースをあらためてご紹介します。

1 新しいモデルラインアップが完成



今年に入り、新たなモデルデリバティブ戦略が発表されました。「Mulliner」モデルを頂点とし、パフォーマンスやスポーティさを全面に出したラインに「Speed」モデルと「S」モデルを、ラグジュアリーやウェルネスを重視したラインに「Azure」を展開しました。すでにMullinerとSpeedは存在していましたが、各モデルにAzureとSが追加され、さらにベンティガ EWBとフライングスパー Speedが発表されたことで、新しいモデルラインアップが完成しました。詳細はアカデミーニュース11月配信号 (No.133) をご確認ください。

なお、新モデルデリバティブ戦略の発表と同時に、新しいブランド戦略も発表されました。これまでのようにハイパワーやレースといった

要素は控え目に打ち出し、ラグジュアリーやパーソナライゼーションの可能性、サステナビリティ、ウェルネスといった側面を中心にアピールしていきます。



2 Beyond 100 戦略の新基軸 ファイブ in ファイブ計画発表



ベントレー モーターズは2月に開催したオンラインメディアカンファレンスで、Beyond 100 戦略をさらに加速させる「ファイブ in ファイブ」計画を発表しました。2025年から5年間、毎年1車種ずつ電気自動車 (BEV) のニューモデルを発表するというものです。この計画の発表に先立ち、サステナビリティを実現するために25億ポンドの投資と、ベントレー初のBEVを英国・クルー工場で設計・開発・生産することも明らかにしました。さらに生産活動による環境への影響をできる限りゼロに近づける取り組みを含む「ドリームファクトリー」構想も掲げ、2030年までにエンドツーエンドでのカーボンニュートラルという目標達成に向けて動いています。



ニュースで振り返るベントレー モーターズの2022年

3 販売店でのカーボンニュートラル達成に向け本格始動



ベントレー モーターズは、2025年までに全世界の全リテラーにカーボンニュートラルの達成を要請しています。その皮切りとして今年5月、英国内のベントレーのリテラー ネットワーク全24拠点が、カーボンニュートラルを達成しました。こういった流れの中で、日本でも英国で展開したのと同様のスキームを用いて、リテラーの皆様にCO2削減計画の策定をお願いしました。カーボンフットプリントの算出やCO2削減の直接的な行動、サステナブルなPOSの行動への取り組みなど、すでに着手していただいたこともあるかと思いますが、カーボンニュートラルの達成に向け、引き続きご協力くださいますようお願いいたします。



4 ベンティガ EWB 発表



ベントレー モーターズは今年5月、「ウェルネス」をキーワードに掲げたベンティガ エクステンデッド ホイールベース (EWB) を発表しました。ベンティガをベースにホイールベースを180mm延長してリアキャビンのスペースを大幅に拡大したこのモデルは、ベントレーの新たなフラッグシップモデルとして期待されます。ベンティガ EWBには、新登場のオプション「エアラインシート スペシフィケーション」が導入され、世界初のシートオートクライメートやボスチュラル アジャストメント システムを含むベントレー史上最も先進的なシートが採用されています。デザイン面でもEWB専用のモチーフが採用されたほか、パワートレインに4.0リッター V8エンジン、ベントレー ダイナミック ラ

イドと電動AWSという先進技術を集めたシャシーを採用し、ドライバーズカーとしても申し分ない性能を発揮します。



5 クルー工場に進むサステナビリティへの取り組み



今年は本社のある英国・クルーの工場とその周辺でサステナビリティへの取り組みが大きく進んだ年でした。工場関連では、本社および工場でカーボンニュートラル認証を更新したほか、環境およびエネルギーに関する2つのISO認証を更新しました。また、物流部門で導入したバイオ燃料によりCO2排出量が大幅に削減され、工業用水の新リサイクルシステムも導入し、システムに引き込んだ水のほぼ全量を再活用しています。工場以外では、高級スコッチウイスキーメーカーのザ・マッカランとサステナブルな未来に向けた異業種コラボが実現し、3年目を迎えたFlying Beeプロジェクトも順調に成果をあげました。ダイバーシティにも注力し、女子学生向けのメンタリングプログ

ラムを開発したり、過去最多の受け入れ数を記録した研修生は、性別やバックグラウンドにとらわれることなく、有能な人材を受け入れています。



COMPETITOR INFORMATION



ロールス・ロイス初の完全電動モデル ロールス・ロイス スペクター

ロールス・ロイスは、同ブランド初の完全電動モデルとなる2ドアクーペの「スペクター」を2022年10月18日に発表しました。現在も250万キロを超えるテスト走行を継続していて、最初のデリバリーは2023年第4四半期を予定しています。

SUMMARY

- 2030年までに完全電動化を実現する同社の電動化時代の幕開けとなるモデル
- 同社のオールアルミニウム「アーキテクチャー・オブ・ラグジュアリー」をベースに製作
- 車名の[SPECTRE]は「幽霊」「亡霊」の意味。「ゴースト」「ファントム」など幽霊に関連する言葉を車名に付ける同社の伝統的なネーミングを継続
- ポジショニングとしては同社がかつてラインアップしていた最高級クーペモデル「ファントム クーペ」の後継
- 2023年第4四半期に最初のデリバリー開始予定



INTERIOR

- イルミネーションの組み込みにより4,796個の星に見立てた「スターライト・ドア」を同社の市販モデルとして初設定
- ダッシュボードの助手席側には、イルミネーションの組み込みにより5,500個以上の星に見立てたイルミネーテッド・フェイスを採用
- インテリアの仕様はほぼ無限の選択肢を実現。ビスポークをデジタルアーキテクチャーにも拡大
- メーター文字盤の色を車両の内装色に近づけることができる機能を初採用
- 全面刷新されたデジタルアーキテクチャーと独自のアプリケーションを統合。リモートでさまざまなインフォテインメント機能の管理・操作が可能



EXTERIOR

- モダンなヨットに着想を得たデザインを採用し、「ウルトラ・ラグジュアリー・スーパークーペ」を標榜
- 伝統的なステンレススチール仕上げのバンテオン・グリルにはこれまでにない角度がつけられ、同社史上最良となるCd値0.25を達成
- 22個のLEDがフロントグリルの裏側を照らして夜間にグリルの存在を際立たせる、グリルイルミネーションを採用
- ファントム クーペの後継にふさわしい横長のデイトランニングライトを採用。その下にダーククロームのヘッドライトを装備
- 同社の「レイス」に通じるファストバックスタイルを採用。大径の23インチホイールを装着



TECHNOLOGY

- 航続距離は520km、消費電力は21.5kWh/100kmを予定。最高出力430kW、最大トルク900Nm。0-100km/h加速4.5秒
- アルミニウム押出材セクションと、バッテリーの車両構造への一体化により、従来モデルより30%高い剛性を達成
- 最下部のバッテリーとフロアの間に配線や空調配管用のチャンネルを設けることで滑らかなアンダーフロア形状を実現
- アンチロールバーの接続/解除制御によりフラットな乗り心地とスムーズなコーナリングを実現するプランナー・サスペンションを採用
- 現在も開発テストが継続しており、2023年の第2四半期までに完了する予定



SPECIFICATIONS

全長：5,453mm	全高：1,559mm	車重：2,975kg
全幅：2,080mm	ホイールベース：3,210mm	価格：未定

COMPETITOR INFORMATION

ニューモデル 予約受注開始：2022年10月12日 / デリバリー：未定

ポルシェ 911カレラT



- ・ 911カレラと911カレラSの中間に位置するモデル。7速MTと8速PDKを用意
- ・ リアシートと遮音材の削減、軽量ガラス、軽量バッテリーの採用などで市販モデルの911における最軽量を実現
- ・ 385PSのエンジンを搭載し、スポーツクロノパッケージとPASMスポーツサスペンション（-10mm）を標準装備

車両価格 (税込)	ポルシェ 911カレラT：	16,400,000円
--------------	---------------	-------------

特別仕様車 受注開始：2022年10月5日 / デリバリー：未定

ジャガー F-TYPE R-DYNAMIC BLACK CURATED FOR JAPAN



- ・ ダイナミックなエクステリアが特徴的な「R-DYNAMIC BLACK」をベースに、人気のオプション装備を追加した日本独自の特別仕様車
- ・ 固定式パノラミックルーフ＆プライバシーガラス、ヒーター付ステアリング、12ウェイ電動フロントシート、プレミアムキャビンライティングを標準装備
- ・ ボディカラー / インテリアカラーの組み合わせはブラック/レッド、レッド/ブラックの2種類。それぞれ20台限定で計40台を販売

車両価格 (税込)	ジャガー F-TYPE R-DYNAMIC BLACK CURATED FOR JAPAN：	15,970,000円
--------------	---	-------------

特別仕様車 予約受注開始：2022年11月17日 / デリバリー：未定

ポルシェ 911ダカール



- ・ 1984年パリ-ダカールラリーでの総合優勝を想起させる、オフロード走行を可能にした全世界2,500台の限定モデル
- ・ 車高はノーマルから50mm高く、標準装備のリフトシステムでフロント/リアをさらに30mm上げることが可能
- ・ 当時のロスマンズカラーをイメージしたラリーデザインパッケージ、ルーフバスケット、ルーフテントのオプション装着が可能

車両価格 (税込)	ポルシェ 911ダカール：	30,990,000円
--------------	---------------	-------------

特別仕様車 発売：2022年11月17日 / デリバリー：未定

キャデラック・エスカレード WHITE SPORT EDITION



- ・ エスカレードに2種類あるグレードのうち、「スポーツ」をベースモデルにした特別仕様車。販売台数は30台
- ・ ボディカラーは標準モデルのオールブラックに代えて、透明感あふれるクリスタルホワイトトリコートを採用
- ・ クリスタルホワイトのボディカラーとメッシュグリル、ブラックアクセントの組み合わせにより、精悍でパワフルなイメージを強調

車両価格 (税込)	キャデラック・エスカレード WHITE SPORT EDITION：	18,000,000円
--------------	---------------------------------------	-------------

特別仕様車 発表：2022年12月15日 / 2023年1月以降

メルセデス・マイバッハ S 680 4MATIC Edition 100



- ・ マイバッハの100周年を記念した特別仕様車。世界限定100台で日本では6台を販売
- ・ 特別仕様車専用のツートーンペイントと専用デザインの20インチホイールを採用。Cピラーに専用バッジを装着
- ・ 内装は「MANUFAKTURレザーエクスクルーシブパッケージ」を標準装備。ナッパレザーをふんだんに用いた専用インテリアを採用

車両価格 (税込)	メルセデス・マイバッハ S 680 4MATIC Edition 100：	42,000,000円
--------------	--	-------------

一部改良 発表：2022年10月13日 / デリバリー：未定

レクサスLS



- ・ リアサスペンションメンバー取付部の剛性アップとサスペンションのチューニングにより、さらなる乗り心地の向上と高い操縦安定性を実現
- ・ 最新マルチメディアの採用とインテリアレイアウトの変更により操作性を向上。機能拡充したパノラミックビューモニターを採用。20インチアルミホイールをオプション設定
- ・ 高度運転支援技術Lexus Teammate [Advanced Drive] には、新たに周辺車両の動きに配慮した減速制御機能を追加

車両価格 (税込)	レクサスLS：	10,780,000円～17,960,000円
--------------	---------	-------------------------

EVENT



8年ぶりにGBラリー開催 新旧の英国車が東京・箱根などを疾走

ベントレー モーターズ ジャパンが特別協賛したザ・グレート・ブリティッシュ・ラリー東京（GBラリー）が11月18～19日の2日間に開催されました。10年に1度の開催とされていましたが、今年はエリザベス女王の即位70周年「プラチナジュビリー」にあたることから、当初予定を2年早めて開催に向けた準備を進めてきましたが、9月8日にエリザベス女王が崩御されました。そして、女王の追悼とチャールズ国王による新しい時代の幕開けを祝うという意味を込め、あらためて第2回の開催が決定。第1回はヒストリックカーラリーでしたが、今回は古き良き英国文化へのリスペクトと新しい英国への希望という理由から、新旧すべての英国車が参加対象となりました。

スタート地点となった東京の英国大使館には、新旧ベントレーはも

ちろん、さまざまな英国車約70台が勢揃いしました。大使館の敷地にはベントレーの現行モデルなども展示し、オープニングではベントレー モーターズ ジャパンの牛尾裕幸もご挨拶を述べました。その後、ジュリア・ロングボトム駐日英国大使がスターター役を務め、大使が振るユニオンジャックのスタートフラッグとともに参加者がスタートしました。

1日目は、大使館を出発して箱根から富士スピードウェイを走り、富士スピードウェイホテルでディナー パーティーを開催。パーティーでは参加者が英国らしい正装に身を包み、英国文化の一部を楽しんでいました。2日目は富士ラリーから箱根ラリー、そして都内ホテルでゴールを迎え、表彰式を行い、成功裏に幕を閉じました。



Flying Beeプロジェクトで 過去最高のハチミツの収穫量を記録

ベントレー モーターズの2022年は、販売台数、売上高、利益などが過去最高を記録する見込みですが、生物多様性を確保するためにクルー本社で実施している「Flying Bee」プロジェクトでも同様に、2022年のハチミツの収穫量は瓶詰めにして約1,000個に上るとみられており、過去最高を記録しました。

#GOTOZERO サステナブル戦略の一環として2019年5月に始まったFlying Beeプロジェクトは、12万匹のミツバチを飼育することからスタートしました。現在は10個の巣箱に60万匹の大きなコロニーを形成しています。地元の養蜂業者である「Buckley Bees」の協力を得て、収穫されたミツバチの巣は同社の生産センターにて遠心分離によって最後の一滴まで抽出されました。その後、この貴重な黄金色の液体はろ過されてデカンタに移され、個別に瓶詰めにする予定です。

ピーター・ボッシュ取締役（マニュファクチュアリング担当）は、「2023年にクルー工場のカーボンニュートラル5周年を迎えますが、この成功には生物多様性が大きく貢献しています。成功を祝う一方で、現状に甘んじることなく、環境への影響をさらに軽減するために常に新しい取り組みを行い、サステナブルなラグジュアリー モビリティのリーダーになるという野望と、エンドツーエンドでのカーボンニュートラル達成に向けて取り組んでいきます」などとコメントしています。



北青山に期間限定ポップアップショールーム ベントレー×アニモカブランドズがコラボ



ベントレー モーターズはこのほど、ウェルビーイングのコンセプトに基づく特別な体験を提供する場として、ウェブ3企業のアニモカブランドズ社とのコラボレーションによるポップアップ ショールーム「BENTLEY EXTRAORDINARY POP-UP in TOKYO」を北青山にグランドオープンしました。アニモカブランドズ1階のギャラリースペースには、ベンテイガを展示。2023年2月15日まで開催しています。

このショールームでは、ウェルビーイング プログラムとして、CyberneX社の最新の脳波計測技術を活用した「NEUROTONE」で脳波計測による楽曲提供サービスを行っています。このプログラムは、ご来場いただいたすべてのお客様に体験いただくことができ、測定後には脳波のレポートとともにお客様ごとに最適な周波数での入眠音楽を提供します。さらに、東京・赤坂で完全会員制にて伝統と革新が融合したこだわりの料理を提供するレストラン「MoDeRiTion - PastaleverreVino (モデリシオン パスタルヴェールヴィーノ)」による招待制ディナーも開催。こだわりの食の体験も提供します。

今後はアニモカブランドズとのコラボプログラムとして、パートナー企業のPassion Labs Inc.とともに、全く新しいWeb3マーケティングの施策を展開する予定です。ブロックチェーン・NFT技術を駆使したファン・エンゲージメントを行い、スタジオ内の体験プログラムを通じて新しいベントレー コミュニティの形成を行うとともに、Web3などのワークショップも実施していく予定です。

究極のグランドツアラー「バトゥール」の テスト走行を開始



マリナーのコーチビルド第2弾のバトゥールが、2台の開発用プロトタイプを使用して欧州各地での走行テストを開始しました。走行テストは58週間にわたり120の個別テストを含む車両全体の広範な開発プログラムの一環で、18台限定シリーズのためにさまざまなエンジニアリングプログラムを経て、2023年半ばから納車が始まる予定です。

検証項目は、エンジンと車両全体の耐久性、環境適合性と日光に対する耐久性のシミュレーション、高速走行時の安定性、空力性能、騒音および振動、そしてドライブダイナミクスなどです。120を超えるテストは、ゴールドのオルガンストップの仕上げの品質から、新しいW12エンジンのハードウェアとソフトウェアに至るまで、すべてを網羅。2台のプロトタイプを使い58週間におよぶ車両検証が予定されていますが、エンジン出力の向上を検証するために完了した100週間以上の開発期間と合わせ、バトゥールは少なくとも740PSを発揮するベントレー史上最もパワフルなモデルになります。

プロトタイプの1台は、実際の状況をシミュレーションするため、ヨーロッパを横断する2,500kmを走行する予定です。ドイツを出発し、イタリア、フランス、スペインを走行した後は、試験場での高速走行テストが行われます。

ベンテイガ EWB が特別賞を受賞 フランスのオートモービル賞・コンフォート部門



ベンテイガ EWBがこのほど、フランス自動車クラブが開催した第5回オートモービル賞のコンフォート部門で特別賞を受賞しました。ベンテイガ EWBは、自動車業界内外の専門家やジャーナリスト、パートナー企業などで構成される20人の審査員によって、「路上で最も快適な車」に選出されました。

同賞の審査員たちは、47車種190台を審査。ベンテイガ EWBがコンフォート部門の特別賞に選出されたことについて、主催者のリオネル・ロバート氏は「ベンテイガ EWBは、私たちが夢見る究極の快適性をエレガントに融合させ、その固有のダイナミズムに彩られています。ベントレーのステアリングを握るとき、ドライバーは完全に道路と一体となり、並外れた快適さの中で車両を完全にコントロールし続けることができるのです。世界初のシートを装備したベンテイガ EWBは、運転を楽しみながらも、その最高の快適さの中で運転してもらうことも楽しめる車です」などとコメントしています。

今回の受賞について、ベントレー ヨーロッパのリージョナルディレクターのバラズ・ルーズは、「クルー工場で作業で仕上げられるすべての車両に、ウェルビーイングに焦点を当てるというベントレーの新たな方針を強調してくれるこの特別賞を受賞できたことは、この上なく光栄なことです。これはクルーのチームの質の高さを証明するものであり、お客様にとっても素晴らしいニュースです」などと話しています。

チャデモ (CHAdemo) とは何か？

クルマが電動化を進めていくと必要になってくるのが充電です。PHV (プラグインハイブリッド) やEVには充電が欠かせません。そして、日本の急速充電方式として普及しているのがチャデモ (CHAdemo) です。どのような特徴があるのかを紹介します。

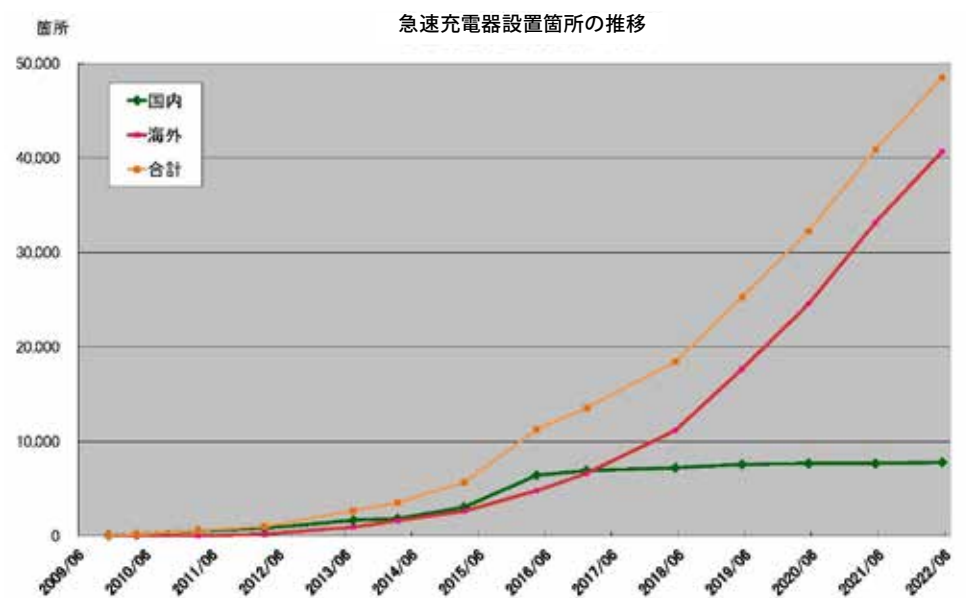
チャデモ (CHAdemo) の歴史とライバル

EVやPHVの充電は、家庭などで行う「普通充電」と、出先などで行う「急速充電」の2種類があります。普通充電は100Vや200Vといった低い電圧の交流 (AC) 電流にて行う方法です。一方、急速充電は最高500Vなどの高圧の直流 (DC) 電流で充電が行われます。そして、日本ではチャデモ (CHAdemo) と呼ばれる方式がスタンダードとなっています。これは2010年に日本の自動車メーカーや電力会社などによって設立されたチャデモ協議会が定めたEV用の直流 (DC) 電力の急速充電の規格名です。世界に先駆けて、量産EVが発売された日本を中心に普及がスタートしました。現在は日本だけでなく、欧州など世界96か国で採用され、4万8000を超える対応機器が設置されています。

ただし、世界市場ではチャデモ (CHAdemo) 以外の方式も存在します。欧米では、交流の普通充電と直流をひとつにまとめたコンボ (Combined Charging System) 方式があり、中国でも独自のGB方式が存在します。それぞれ、急速充電に使うプラグが異なるため、欧米などでは、ひとつの充電器にチャデモとコンボの両方に対応するために、複数のケーブル&プラグが備わっているものも存在します。ちなみにEV専門メーカーであるテスラも独自のプラグを用意していますが、チャデモに対応するためのアダプタが用意され、日本のチャデモ用の急速充電器を利用できるようになっています。



欧州で普及が進むコンボ方式のプラグ。アメリカのコンボ方式は、また別の形をしています。



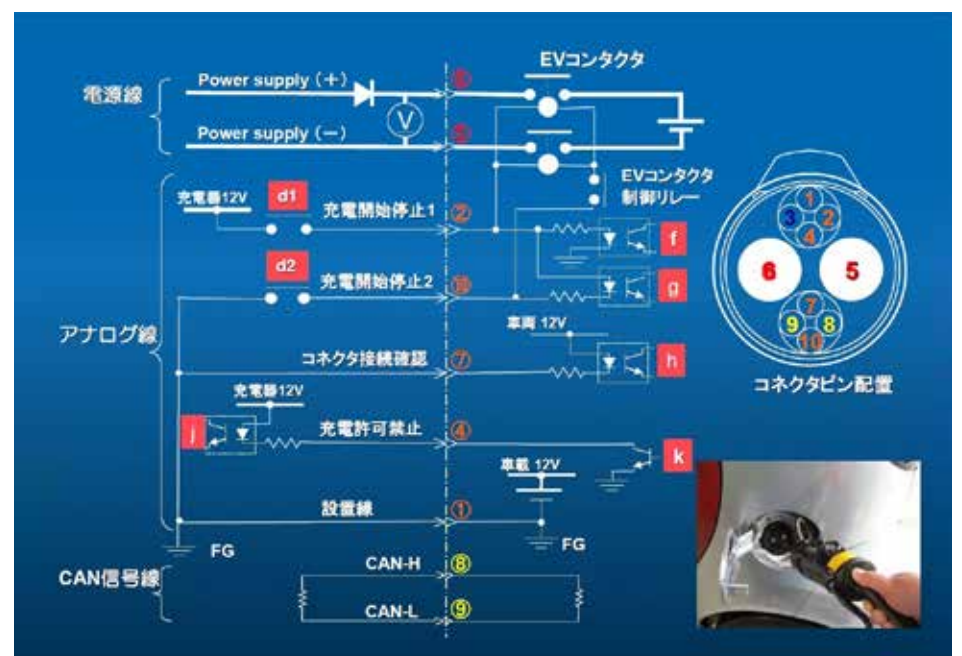
チャデモ方式の急速充電器の数。日本国内は7700～7800で足踏み状態ですが、海外では順調に数を増やしています。

チャデモ方式の充電の仕組み

チャデモ (CHAdemo) は、EVと急速充電器の間で、安全かつ迅速に充電を行うためのプロトコル (手順) を定めた規格です。プラグの接合部を見ると、ピンを備えた丸いコネクタが数多く存在します。大きな2つのコネクタは、プラスとマイナスの直流電流を流すためのもの。他の小さな丸のコネクタは、EVと急速充電器との間で通信を行うものです。2つのピンでデジタルのCAN通信を行い、他の5つのピンでアナログ通信を行います。デジタルとアナログを併用することで、誤作動を防ぎ安全性を高めます。EVと急速充電器の間で情報をやりとりしながら、電池の温度が急上昇しないように、電圧を調整しながら充電を行っています。



チャデモ (CHAdemo) 方式は、普通充電用と急速充電用の2つのコネクタが必要となります。



チャデモ方式のコネクタに与えられた役割。電源供給とCAN通信、アナログ通信を行います。

次世代の急速充電の姿

世界に先駆けて普及したチャデモ (CHAdemo) 方式ですが、弱点も存在します。それは出力が50kWと小さかったこと。導入当初の10年前はそれで十分でしたが、近年に登場したような大容量のバッテリーを搭載するEVでは、充電に時間がかかりすぎてしまいます。そのため、チャデモ (CHAdemo) 協議会では、次世代の規格「チャオジ (ChaoJi)」を発表しました。これは、日本と中国が共同開発したもので、最大900kWもの高出力を実現します。また、アダプタを用いれば、従来のチャデモ (CHAdemo)、中国のGB、欧米のコンボ方式の充電インフラを利用可能なのも特徴です。次世代のスタンダードの規格になることが期待されています。



高出力での充電を可能とする次世代のチャオジ (ChaoJi) のコネクタ。



次世代のチャオジ (ChaoJi) は、アダプタを使うことで、従来方式の充電器でも使用可能になるのが特徴です。



チャデモ (CHAdemo) 方式のコネクタ (写真上) と、一回り小さな次世代のチャオジ (ChaoJi) のコネクタ (写真下)。